-253- 骨シンチグラムにおける胸部の不明集積像

熱海総合 整
○丸山俊章
同 核診
竹内方志
昭大 放
菱田豊彦

bone seeking agent として、1971年 subramanian らが ^{99m}Tc－tripolyphosphate を使用して以来、現在各種の燐酸化合物が使われている。これらはその半減期が短かいことから、被検者に対する被曝線量が少なく、現在のところ理想的な核種の一つと考えられる。又、各種の燐酸化合物によるシンチグラフィーの研究も数多く報告されている。しかしそれらにともない、いくつかの問題点もあげられている。特に RI が尿中に排泄されるため膀胱付近の読影は困難なことがある。胸部においては肩甲骨下端への集積、胸鎖関節への集積、胸骨への集積等がみられることがある。又、肋骨々折や悪性腫瘍の肋骨への転移などでも当然のことながら集積をみる。我々は現在脳卒中による片麻痺や脊髄損傷において、時に出現する異所性骨化の発見、及びその病勢判定に ^{99m}Tc－diphosphonate によるシンチグラムを応用しているが、特にそれらの中で片麻痺患者の胸部像において、局所的な異常集積をみることがあつた。これらの異常集積を示す例のうち、肋骨々折転移性骨腫瘍、カルシウム沈着等が否定され、その集積機序が不明であつた症例が、片麻痺患者約 30 例中 4 例認められた。このことは特に転移性骨腫瘍の RI 診断において、考慮すべき問題であると考え、これら不明集積像を認めた症例を供覧する。

-254- 慢性関節リウマチの骨シンチグラム所見

慈恵医大 整形外科
○大森薫雄，伊丹康人
国立長野病院
吉松俊一
神奈川リハビリセンター
岡本連三

我々は ^{99m}Tc－pertechnetate を用いた関節のスキャンによつて、関節の炎症活性を的確にとらえることができ、本法が病勢の判定、治療効果の判定に有力な検査法として応用できることについて報告した。今回は慢性関節リウマチ患者96症例に関節炎のスキャンをおこなつたものに、さらに ^{99m}Tc－diphosphonate による骨スキャンをおこない、両者を比較したので、その結果について報告する。

＜方法＞ 骨スキャンは ^{99m}Tc－diphosphonate 10mci 静注后2時間で全身スキャンをおこない、さらに局所のライフサイズスキャンをとつて、前もつておこなつた関節スキャンおよびX線像と比較検討した。尚、関節スキャンは ^{99m}Tc－pertechnetate 10mci 静注后30分でスキャンをおこなつた。アメリカリウマチ協会の分類による classical および Definite Rheumatoid Arthritis で、Stade Ⅰ から Ⅳ までの各病期のものを含んでいる。

＜結果＞ 骨シンチグラムでは RA の初期でX線上、ほとんど変化がみられない時期にもすでに炎症のつよい関節にはつよい異常集積がみられた。また、炎症が緩解してもX線上骨に変化がみられる関節にはつよい集積がみられた。一方さらにX線上病勢が進行して強直におちいつた関節では RI の集積は減少していた。
したがつて慢性関節リウマチにおける骨シンチグラム診断は、病変関節部位の早期発見、病勢判定に有用である。

一方関節スキャンは局所炎症関節の活動性をよくあらわしていた。したがつて、病変関節部位の早期発見はもちろん病勢判定に有用で、たとえX線上、骨に変化がみられても局所関節の炎症活性がおさまつてくると、RI 集積は減少してきた。骨シンチグラムと関節スキャンはX線上骨に変化がみられない早期発見という点では関連性がみられたが、X線上骨変化のつよい関節については、それぞれことなつた所見がみられた。

Presented by Medical*Online